

2020年1月5日 川越教会

## 神の最大のプレゼント

丸山 勉

### [聖書] ヨハネによる福音書 3章 16～19 節

神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。

### [序] 聖書全巻を要約する言葉

2020年最初の日曜日になりました。元旦礼拝も行いましたけれども、1月最初の日曜日をご一緒に迎えて礼拝を捧げることが出来ますことを感謝しています。また、昨年一年間もこの拙い者をお支え下さり、感謝しております。今年もご一緒に信仰生活、また礼拝の生活をして参りたいと思います。どうぞ宜しくお願い致します。

その年の初めに、有名なヨハネによる福音書の3章16節をご一緒に聴くことが出来ることは恵みだと思っています。—「神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。」

この御言葉をマルチン・ルターも特に愛し、「小聖書」或いは「小福音」とも言いました。聖書全巻の使信・メッセージを凝縮するとこの一言になるということです。つまり、たとえ他の聖書の言葉を忘れてしまってもこの言葉を握っていれば、あなたは聖書の真理・福音を自分のものとしているに等しいということです。

『聖書教育』誌に添って、イースターを迎える今年の4月までこの「ヨハネによる福音書」を読み進めて参ります。このヨハネ福音書の最後の方、20章31節には、この福音書が書かれた「目的」がハッキリと書かれています。これは大切な言葉だと思いますのでお読みしますと、こういう言葉です。

「これらのことが書かれたのは、あなたがたが、イエスは神の子メシアであると信じるためであり、また、信じてイエスの名により命を受けるためである。」と。

ヨハネによる福音書が指し示すのは、この「イエス」こそ「メシア(救い主)」、また「神の独り子」であり、私たちはこの方を信じることで永遠の命を得ることが約束される、ということです。

## [1] ヨハネによる福音書が書かれた背景

ただ、この言葉が記されている3章は、どこまでがイエス様の言葉で、またそうではないか、分かりづらいことがあります。1節から15節まではイスラエルの教師ニコデモとの対話が記され、イエス様の言葉が明確に分かりますが、この16節以下は、イエス様が語られた言葉と言うより、恐らくこの福音書を書いたヨハネか、ヨハネの属する教団（ヨハネ教団）の宣教の言葉、招きの言葉だと捉えられます。文体や、用いられる言葉が変わってきています（「人の子」が「独り子」に変わったり。またイエス様をご自分を「独り子」とか「御子」とは仰らないでしょう）。

イエス様の言葉でない、ありがたみが無いとお思いになりますか？ いいえ、そんなことはありません。この福音書の一節は、言ってみれば命懸けで書いた、そんな言葉なのです。

この言葉で伝えられていることは何でしょうか？——それは聖書が語るクリスマスのメッセージと同じと言っても良いでしょう。すなわち、「神ご自身が、人の姿を取られてこの世（世界）にやって来られた。それは、私たち人間と同じ姿になれることによって、私たちを神様のもとに連れ戻す（救う）ためである」ということです。「神はその独り子をお与えになったほどに」という時の「独り子」、この方こそ、**イエス・キリスト**です。先週開きましたこのヨハネの福音書の1章では、このイエス・キリストこそ**神の本質（ロゴス）、そして「神の言葉」そのもの**だと語っていました。「（この）言葉は肉となって、私たちの間に宿られた」（1章14節）、正にクリスマスの出来事です。

「イエスこそ人となった神だ、この方のもとにだけ人間の救いがある」と語っている訳ですが、これを語ることは当時、大きな戦いがあったようです。ヨハネ、またヨハネ教団は、辛い**迫害の中にあつた、その中でこの「神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された」と告白し、また宣教したのです。**

ヨハネがこの福音書を書いたのは紀元90～95年頃とされています。それは70年のローマ帝国とのユダヤ戦争の時にエルサレム神殿は崩れ、その後ユダヤ教の指導者であるラビたちが集まり、ユダヤ人たちが生きていくすべを考え、「**ヤムニア会議**」と呼ばれている会合を開きました。その中で旧約聖書の律法を重んじての礼拝と生活を組み立てていくことが決議され、また、**キリスト教を正式に異端としてユダヤ教から排除することが決議されたのです。**キリスト教はそれまではユダヤ教の傘の下に収まっている限り帝国からの迫害は受けずにすんでいたのですが、ヤムニア会議以降は、**組織的なキリスト教迫害が始まりました。**迫害を恐れ、「もう、イエスを神の子ということはやめよう」と人々も沢山出てくる、そういう時代背景の中でヨハネによる福音書は執筆されたのです。

そのような中で、キリスト者たちの交わりに与えられている**福音とは何なのか、何が信仰のいのちなのか**、そこに何としてでもそこに立ち続けるよう、信仰の仲間たちに伝えたかった。その福音のメッセージの要約がこの**ヨハネ 3 の 16**なのです。

## [2] 神様の愛と裁き

それを踏まえると、このヨハネ 3 の 16 は大変なことを言っているなあと改めて思われます。「**神はその独り子をお与えになったほどに、世を愛された**」。自分たちを迫害し、いや殺そうとする「世」です。そんな「世」は、「敵」であるはずですが。人を殺そうとする「世」、殺しあう「世」を神様が滅ぼすのなら、私たちはどこか納得するではありませんか。

今また、世界が危なっかしくなっています。一步間違えれば世界を巻き込む戦争になりかねない状況です。そしてそういう時、今も昔もそうですが、世の支配者たちは、自分の報復の正当性を主張します。それで歯止めが効かなくなってしまっているのではないのでしょうか。…しかし、神様はこのどうしようもない「世」を一刀両断されないばかりか（そうなさることが出来る唯一の存在であるのに）、**この世を愛して、ご自分の独り子をお与えになった**と言うのです。何故でしょうか？ この「世の中」とは、実は「私」のこと、「あなた」のことでもあるからです。「あいつ」だけが悪なのではないのです。神様からご覧になったら、「義人なし、ひとりだになし」「皆、罪びと」なのです。

神様は、私たちが神様のもとを離れ、飼い主のいない羊のように彷徨うのを見ていられたのです。そして、神様の憐れみそのものであるイエス様を、私たち**罪びとの友**としてお遣わし下さり、それどころか**私たちの身代わり**となって、**十字架で死んで下さった**のです！これが「**お与えになった**」ということです。独り子をお与えになった。つまり、私たちのために**死なせた**、ということなのです。これは私たちが神様にお願いしたからそのようになさったということではありません。そもそも、**ユダヤ教**においては、神様は、超越した唯一神です。神様の独り子などという考え方も、ましてや、神様が人間の姿となって現れるなどと云う考え方は異端だったのです。だからこそキリスト者は異端視されたのです。神様というお方が、**そこまで人間のために低くなる、謙るなどということはありません**でした。…そのあり得ない事を、神様は時至って、あのクリスマスの夜にして下さったのです。本当に人間を「**愛する**」が故です！これが、神様をご用意下さった**救いの方法**だったのです。

私たちはただこの神様の救いを受け入れるよう、招かれています。この聖句は**招きの言葉**でもあるのです。旧約聖書の中でやがて現れると示されてきた**メシア**(救

い主)とは、あの十字架におかかりになったイエス・キリストなのだ、そして、このお方は、甦られて、いつもあなたを愛し、共にいる方として生きておられる。そのことを信じ受け入れることがあなた方の救いだと言っているのです。

そして、その神様の「愛」と「裁き」とは一つです。ヨハネ福音書はこう語ります。

「独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。神が御子を世に遣わされたのは、世を裁くためではなく、御子によって世が救われるためである。御子を信じる者は裁かれない。信じない者は既に裁かれている。神の独り子の名を信じていないからである。光が世に来たのに、人々はその行いが悪いので、光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。」(3:16 後半～3:19)

「一人も滅びないで」と神様は仰っています。神様のみこころは「一人も滅びないで」です！ それは「断罪しない」ということでもあるのではないのでしょうか？ 私たちのこの世は、断罪、裁き合いになりやすいです。身近なところでは兄弟喧嘩、或いは夫婦喧嘩、それで泥沼状態になってしまったり…。いや、教会だって天使の集まりではありませんから、主にある寛容を失うと「絶対にそれはおかしい」と互いに主張し合い、相手を許せなくなります。けれども皆、神に愛され、赦されている者同士、神の国の民なのだ、私の愛のもとでひとつであってほしい、私の十字架を無にしないで欲しい、と言われているのではないのでしょうか？

この主イエス様によって現された神様の愛を拒否すること、拒むことが、既に「裁き」なのです。神様が私たちを叩くというより、神様の愛の外に彷徨うことが「裁き」になっているのです。使徒パウロはこの言葉をこのように言い換えました。

「十字架の言葉は、滅んでいく者にとっては愚かなものですが、わたしたち救われる者には神の力です。」(コリントの信徒への手紙一 1:18)

### [3] 主イエスという神様の「プレゼント」

今回準備をされていて気付かされたことがありました。私は今日の題を「神の最大のプレゼント」としました。「プレゼント」とは「贈り物」のことだとすぐに思いますが、近い言葉に「プレゼンス」という語がありますね。これは、「出席する」「存在する」という意味です。そして「プレ」というのは、「前に」という意味があります。大切なものをあげるときにその人の前にモノを差し出すこと、それが「プレゼント」なのです。今風に言えば、“宅配便”というよりも、新年のお年賀のように、直接に私という存在を通して渡す贈り物が「プレゼント」なのです。そこには思いが込められています。神様の、私たちへの深い愛の現れ、それが「主イエス・キリスト」という、神様の最大のプレゼントです。

## 〔結〕 永遠の命を信じて

最初の方でお話したマルチン・ルターは、死の床において、その地上の命の尽きるとき、自ら「小聖書」「小福音」と呼んだヨハネによる福音書3章16節の言葉を繰り返し味わい、口にして、祈りつつ息を引きとったと言われます。その祈りの言葉が残されています。

「主イエス・キリストよ、私の魂をあなたに委ねさせてください。天の父よ、私はこの体から引き裂かれようとも、あなたのもとでとこしえに生きることを知っています。神は、その独り子をお与えになったほどに、世を愛された。独り子を信じる者が一人も滅びないで、永遠の命を得るためである。これは本当のことだ。アーメン。父よ、あなたの御手に私の魂を委ねます」。

このヨハネ福音書が書かれた紀元一世紀のローマ帝国や、ユダヤ教から迫害を受けたキリスト教会とキリスト者たちは大変だったと思います。しかし、どのような試練にあったとしても、私にはこのイエス・キリストがいる！この方は私たちの苦しみを知り、死んだ後も永遠の命の中にとこしえに生かして下さい。そのことを信じて主に従ったのです。この神様の大きな愛を信じる事が出来る時、私たちは自分の命さえ、自分のためにだけ用いるのではなくて、神様のため、他者のために用いる事が出来るように変えられていくのだと思います。「**神が憐れみ深いようにあなた方も憐れみ深いものとなりなさい**」(ルカ6:36)と主は語られました。

神様は、どんな人をも分け隔てなさいません。私たち一人ひとり、皆違います。その一人ひとりを、この「世」に生きる尊い存在として、深く受け入れて下さっています。神様は人間を顔かたち、年齢、国籍、性別、才能で判断されないお方です。たった一人の「あなた」として見ていて下さいます。「**神はその独り子をお与えになったほどに、“あなた”を愛された**」のです！この神様の愛に打たれて、神様に引っ張って頂く、導いて頂く生涯を歩んで参りましょう！与えられる出会いを、**神様から贈られた出会い**と信じて一緒に生きて行きましょう。信じる私たちには、**祝福されたゴールが約束されている**のですから！

お祈りを致します。